

## 宮沢賢治「猫の事務所」と郡役所廃止

——政治的世界・民俗的世界・賢治の内面世界の重層性——

米地 文夫\*

### 要 旨

宮沢賢治の短編「猫の事務所」は、事務所の末席の書記かま猫に対する「いじめ」の問題を取り上げた作品として近年注目されているが、結末では訪れた獅子によって解散を命じられ、廃止となる。本論文はこの作品が実は政治的世界・民俗的世界・賢治の内面世界の三者が重層的に組み込まれたものであることを明らかにするものである。組み込まれた政治的テーマは郡役所廃止問題で、「猫の事務所」の位置や役割、事務室の人員構成などの描写から稗貫郡役所がモデルであり、1926（大正15）年6月30日に閉鎖になる。「猫の事務所」はこの年の3月に発表されている。郡役所の廃止は既定のことではあったが遅延していたのを、浜口雄幸蔵相の緊縮財政のもと廃止が確定し、浜口が内相の時、廃止される。獅子はライオンとあだ名された浜口なのである。この物語の民俗的な背景は、竈の煤で黒く汚れた猫をかま猫と呼ぶことと、獅子舞が火伏せの竈祓いに訪れることなどである。獅子はかま猫の守護神のような存在なのである。さらに、同僚に対する態度を自省する賢治自身の心境も反映したものである。すなわち「猫の事務所」の獅子による解散は郡役所廃止と浜口雄幸の決断とをカリカチュア化したものであり、主人公かま猫と巡回してきた獅子というキャラクターは、竈をめぐる民俗から生み出され、職場の同僚による「いじめ」は賢治自身の職場体験によるものであった。

### キーワード

宮沢賢治, 郡役所, 浜口雄幸, かま猫, 竈獅子

### はじめに

宮沢賢治の短編「猫の事務所」は、「いじめ」の問題を取り上げた作品として、近年、かなり広く読まれるようになってきた。この作品は、猫の地理と歴史を扱う事務所が舞台で、事務所員は事務長の黒猫のほか書記が4人（匹）で一番書記が白猫、次いで虎猫、三毛猫、かま猫の序列で構成されている。末席の第四書記「かま猫」は、同僚のいじめや讒言に遭い、仕事からも外されるが、物語の終わりに突然、獅子が現れ、こんなことでは事務所などは要らないといい、解散を命ずるという物語である。

賢治の作品としては比較的単純で、一見、わかりやすく見えるストーリーであるため、「童話」と

いうジャンルに分類され、子ども向きの図書に収められ、また絵本やアニメなど、子ども向けの作品として扱われがちである。

しかし、この作品「猫の事務所」には、よく読むと、賢治の他の作品同様、謎が多い。この作品は随筆雑誌『月曜』の1巻3号、1926（大正15）年3月発行に掲載されたもので、子ども向けの雑誌に載ったわけではない。表紙の目次に、ただ「寓話 宮沢賢次（ママ）」とのみ記され、本文の「猫の事務所」という題の前の行に「寓話」と書かれたこの作品<sup>1)</sup>は、紛れもなく大人向けの「寓話」であり、その「寓意」はなにか、が問題なのである。

一般には、この作品は役人根性への風刺であるといわれているが、同輩による「いじめ」の話は

\* ハーナムキヤ景観研究所

役所に限らないはずである。この「猫の事務所」と同じく役人根性への風刺とされる賢治の短編「二人の役人」の方は、上（東北長官という架空の上司）に諂い、媚びるとともに、下すなわち庶民には高圧的な態度をとる、いかにも往時の役人らしい姿を描いているが、「猫の事務所」にはそのような風刺は、希薄である。

また、本文の副題には「…ある小さな官衙に関する幻想…」とあるが、賢治は何を幻想したのであろうか、幻想と当時の社会や賢治周辺の現実とは、どのような関わりがあったのか、という点が作品の寓意をはじめ多くの謎を解く鍵であろう。

この作品の謎として、続橋（1980,1985）は多くの研究上の課題を提示した<sup>2)</sup>が、筆者はそれらのうちから主なものを選び、番号を付して、以下に列挙してみた。

1. 猫をかりて社会（特に役人根性）批判を試みた理由は何か
2. 初期形での〈猫の戸籍〉調査が、なぜ発表形で〈猫の歴史と地理〉になったのか
3. 初期形末尾の〈かあいさう、かあいさう〉が削除された理由とその意味は何か
4. なぜ突然獅子があらわれて事務所の解散を命ずるのか
5. なぜ獅子がすこしの間事務所のなかを見ただけで、事情を洞察し得たのか
6. 獅子の登場をみて他の四匹の猫がおろおろするだけだったのに、なぜ、かま猫はそれまで泣いていたのに、泣くのをやめてまっすぐに立ったのか

これらの問題に対して、筆者はこの論文で、地域行政に注目し、続橋の課題・問題点のうち1に関連して、賢治がこの作品を執筆していた当時の花巻にあった稗貫郡役所が「第六事務所」のモデルであったことを検証する。

次に続橋の挙げた課題・問題点の2については、郡役所の業務や賢治自身の教師集団内の体験との関連を考察し、猫の事務所が歴史と地理を扱うという設定の背景を探る。

さらに、岩手で少年時代を過ごした筆者自身が、

子供のころ聞いた「カマネコ」という言葉の用例や、季語としての寵猫などから、賢治の「かま猫」を考え、続橋の問題点の3～6を解く重要な存在に寵神としての「獅子頭」について論ずる。

問題点の4は本稿の中心的な問題であり、当時、地方にあっては極めて大きな問題であった郡役所廃止という政治的状況との関わりに著者は注目した。さらに、獅子には当時の浜口ライオン蔵相が重要なモデルとなっていることを見いだした。

## I. 「猫の第六事務所」とは何か

### I-1. モデルとしての郡役所

小倉（1957）は、この作品を「小動物の世界をかりた『役人根性』に対するユーマーと諷刺たっぷりな好個の寓話であり、『お役所風景』のかりかチュアである」とし、続橋（1980）は、これを受けて「〈役人根性〉批判は『二人の役人』などに関わる」と記した。では、もし役人根性への風刺や批判であるならば、どのような役所がモデルとなったのであろうか。初期形で戸籍を扱う役所とし、発表形直前の草稿でも「実は猫の方では戸籍のことがみんな歴史になっているのです」という部分があったので、戸籍を扱う町役場あるいは郡役所がモデルである、と考えられる。当時、花巻にあった「軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました」という書き出しに合致する官衙は、岩手軽便鉄道の鳥谷ヶ崎駅のすぐ近くの稗貫郡役所である。この場所は1902(明治35)年以降の所在地で、当初は里川口町に開設された。

稗貫郡役所は、1878(明治11)年7月23日に公布された郡区町村編成法<sup>3)</sup>に基づき、翌1879年に、岩手県下の19郡の一つとして設置された。旧代官所跡に設けられたこともあって、稗貫68ヶ村を支配する性格のものと住民には受け取られていた。実際、府県の下に郡があり、中央政府の末端行政を司るものとして、郡長は中央政府から派遣された。さらに郡の下には区町村があったが、これは地元の有力者が政府の伝達を受ける組織であり、国→府県→郡という上意を伝える官の体制と、区

町村というそれを受ける民の下達の対象の単位とがあったのである。その意味で郡役所は賢治の作品「猫の事務所」の副題に「…ある小さな官衙に関する幻想…」とあるが、賢治はその「官衙」の「衙」を用いて、文語詩「光酸」などには「郡衙」と書いており、その「郡衙」すなわち郡役所が、モデルである可能性がこの点からも極めて高いのである。(なお、郡役所という用例も文語詩「修羅白日」などにある。)

郡区町村編成法は府県会規則、地方税規則とともに地方三新法と呼ばれた。これらの公布以前は大区・小区制で、明治初頭までの郡-組-町村という組織に変えて、末端まで中央政府の直接支配を行おうとしたものであった。地方三新法は、区町村レベルでは、ある程度は地方の自治を認める、やや柔軟なものになったが、郡までの上位の官衙が戸籍などによる国民動向の掌握を図るものとして、依然として、中央政府の強い地方支配組織の末端として地域を掌握し、住民を統治する役割を担っていたのである。

1897(明治30)年には、新しい郡制が施行され、稗貫郡も岩手県13郡の一つとして、郡は法人となり、自治形態の行政をとることとなり、郡議会も設置された。しかし、かつては極めて重要な地方行政組織として、明治新政府の根幹を支える税収や徴兵のための基礎的資料を整備する実務に当たった郡役所も、すでに1889(明治22)年以降は、市町村が自治制をとるようになっていたので、国と市町村との間に府県と郡と二つの中間的な行政機関があることになり、郡は屋上屋を重ねるものとなり、その存在意義が薄れていた。

稗貫郡役所の建物は1902(明治35)年に、現花巻地方振興局付近の地に移転し、のちに岩手軽便鉄道の鳥谷ヶ崎駅がすぐ近くに設けられた。賢治は盛岡高等農林の研究生当時の1918(大正7)年以降、この稗貫郡役所からの依頼を受けた関豊太郎教授の指導の下、郡内の地質および土性調査を行っており、その成果は1922(大正11)年に公刊されている。地元の賢治は特に調査等に関する連絡のため郡役所との接触が多かったであろう。し

かも、花巻農学校としての新築移転前においては、佐藤(1987)のいうように、賢治の勤めていた稗貫農学校の職員室のすぐ向こうに、いつでも見えていた身近かな役所なのであった。

その郡役所は、1926(大正15)年6月30日限りで閉鎖になるが、「猫の事務所」はこの年の4月1日に発表されている。実は、郡役所はすでに自治体としての機能を失っており、その廃止は、賢治がこの寓話を書いている頃、既定の事実であった。このことについてはⅢ章Ⅲ-3において詳しく述べる。

この郡役所は、明治26年2月の岩手県訓令による郡役所服務規程(『岩手県史 第8巻』)によれば、郡書記は1郡10名程度で、郡役所は庶務課と財務課の2課からなり、1課は郡書記の1人が課長を勤め、外に書記が4人配属されるという編成が標準となり、「猫の事務所」はその一つの課と同じ編成になる。「猫の事務所」も所員は書記と呼ばれる点もちろん郡役所と同じになっている。

稗貫郡役所が「猫の事務所」のモデルであるとした場合、疑問があるのは「猫の事務所」の規模が、郡役所の規模よりも小さいことである。しかし1878(明治11)年の開設後しばらくの間は、岩手県の郡役所の職員は少なく、翌年5月においても郡長1名と郡書記3~4名であった。そのため県は1879(明治12)年6月の布告の中に次の一項を入れている。

「各郡役所ニ於テハ吏員モ多カラズ候ヘバ郡長座席ハ必ズ書記以下同様ノ箇所ニ相設ケ親シク其事務ヲ督励可致事。」(『岩手県史 第8巻』)

モデルの稗貫郡役所は、その建物が花巻市の大迫地区(旧大迫町)に移築されているが、総二階で、廃止前は郡長のほか書記10名が主たるメンバーであったから、「猫の事務所」の建物が平屋で事務長を含め書記5名という規模は、郡役所の半分になる。

郡役所は国の出先機関であったから、各郡役所は共通する点が多いので、郡役所の創設時の間取りや室名と用途、職員構成、などについての資料の残されている山形県の天童市立旧東村山郡役所

資料館で調査を行った結果、いくつかの興味深い事実がみつかった。まず、東村山郡役所<sup>4)</sup>の場合は、二つの事務室を有し、これが面積の大半を占めており、稗貫郡の場合も同様であったと思われるので、一、二階にそれぞれ一つずつ事務室があったと推定できる。さらに、東村山郡では、その二つの事務室が、創設時にはそれぞれが正式には「事務取扱所」と呼ばれ、略して「事務所」と呼ばれていたのであった。

岩手県においても同様であったと考えられる。この「事務取扱所」の名は、郡役所の創設以前の大区ごとの事務取扱所（区務扱所と略称）から引き継がれたものであった。

このことから、稗貫郡役所も、各階の一つずつの事務室がそれぞれ独立的に「事務所」と呼ばれていたと考えられ、後年までその呼称が残っていた可能性が高い。したがって、一階に一課、課長以下5人が勤めていた部分が、一つの事務所となっていたわけであり、「猫の事務所」と全く一致することになる。

また、「猫の事務所」のトップの事務長猫が郡長に相当すると考えると、ほかの書記猫たちと同室であることは一見、不自然で、郡長室というような部屋に居たのではないかと考えたくなるが、実際は「猫の事務所」と同様に、郡長も書記と同じ事務室で執務していたのである。それは前記布告の「郡長座席ハ必ず書記以下同様ノ箇所ニ相設ケ」る形はその後引き継がれたらしく、「猫の事務所」においても郡長にあたる事務長猫と書記猫たちは同室で働くのである。

「猫の第六事務所」のモデル花巻の稗貫郡役所が、なぜ第六なのかは次のように考えられる。当時、岩手県内には13の郡役所があったが、北から順に上げると、九戸（久慈）、二戸（福岡）、岩手（盛岡）、紫波（日詰）、下閉伊（宮古）の順になり、第六番に稗貫（花巻）がくる。以下は、上閉伊、和賀、胆沢、江刺、西磐井、東磐井、気仙の各郡となる。賢治がこのように、北から順に番号を付けた例としては、猿ヶ石川を北上川第七支流と呼んだ例（詩「岩手軽便鉄道 七月（ジャズ）」）が

あり、小沢（1975）は北上川の支流を北から順に数えて第七番であるとした。

## I-2. 郡役所と「歴史と地理」

初期形では「戸籍」を扱うものだった猫の事務所が、「歴史と地理」を扱うものになったのはなぜであろうか。

もともと、事務所が扱う仕事は、「戸籍」であった初期形から、途中の形で「歴史」に変わって「実は猫の方では戸籍のことがみんな歴史になっている」となり、最後に「歴史と地理」になるという推敲過程があったのである。

前掲の明治26年2月の県訓令による郡役所服務規程には、庶務課の8項目の仕事のなかに、「土木地理ニ関スル事項」と「戸籍兵事ニ関スル事項」がある。これは地理と歴史（この場合は戸籍）を扱う「猫の事務所」と対応している。

明治新政府は、それまで各藩が領していた土地とそこに住む住民とを、新しく国民国家の国土と国民として直轄し掌握しようとした。そのためには、内務省に地理局を設けるなど、中央の体制づくりとともに、国土の隅々まで地籍、戸籍の整備、地図の作成、地誌や各種統計の作成などの作業を行う末端の行政機関が必要で、これにより全国を掌握することが可能になるのであった。その末端の行政機関が郡役所であった。これらの業務は、徴兵や徴税の基礎資料であるとともに、産業振興、インフラ整備、国防等々、あらゆる面で、新政府に不可欠なものであった。

賢治の「猫の事務所」における「歴史と地理」は、このようなかつての郡役所の業務を、いわばパロディ化したものといえるのである。

## I-3. モデルとしての郡立農学校

賢治は郡役所の外の間人であり、役所勤めの経験のない賢治は、実在の郡役所を場のモデルとしても、中の人間関係については、彼が働いた職場の場合を中に入れ込んだ可能性が高い。とすれば、「猫の事務所」は、賢治がこの作品執筆時まで働いた唯一の職場である農学校の職員室での人間

関係を寓意しているのではないか、という推測ができるのである。この「事務所」を、初めの原稿では戸籍を扱う普通の役所を想定したが、やはり学校的に地理と歴史を扱うという役所的でない役所の設定と変えたのもそのためであろうか。新校本宮澤賢治全集第12巻に収録された、発表形に先立つ、おそらくは発表直前の最終形態の草稿には、「地歴」という語が次のように出てくる。「猫どもに地歴の事務所があるといふのは…」、この地歴は、もちろん地理歴史科の略であり、教育界の用語である。

猫の事務所を事務長のほか書記が4人（匹）としたのは、農学校の校長ほか教師が4人（他に助手1人）という職員室であることと、良く似ている。農学校の場合は、それぞれが机を持っていて、校長の机の左右に、2人ずつ教師の机があるという配置《堀尾（1991）の机配置図による》は、校長を事務長に、教師を書記に置き換えれば、「猫の事務所」と同じである。このことはすでに木佐（1990）が、注目している。規模からみても、農学校の5人の構成は「猫の事務所」と同じで、郡役所はその倍以上の人数であったから、農学校の方が、その点では郡役所よりも、さらにモデル的であり、郡役所と農学校との重合が「猫の事務所」とみられるのである。

「猫の事務所」の初期形原稿では、かま猫の欠勤の理由にありもしない中傷をする場面で、虎猫が「どこかのご馳走に呼ばれて行ったんだらう」とあるのが、発表形では「どこかの宴会にでも呼ばれて行ったらう」となり、続けてどこの宴会かという問いに答えて「なんでも北の方で開校式があると言ひましたよ」と言わせている。普通の役所の設定ならば、普通は開所式とか開署式と書くのではないだろうか。事務長とはあるが校長をさしおいて、他校の開校式に招待されて行ったということではないだろうか。つまり、賢治の心の中で、学校か、あるいは郡視学を想定していたことを窺わせているのである。

賢治の『春と修羅』の中の詩「小岩井農場」に描かれた賢治の心理風景に着目したのは、続橋

（1992）である。賢治は、農学校の温和でまっすぐな性格の同僚に対して、いつのまにか高飛車で意地悪いことをしてしまう自分の心の中の修羅的状态を述べている。続橋はこのことを指摘したのみであるが、筆者は、この「小岩井農場」の賢治の気持ちは、「猫の事務所」のかま猫をいじめる猫にも仮託されていると考えた。この詩のなかで堀籠さんとして登場する同僚とは、賢治の同僚教諭のなかで最年少の堀籠文之進である。「堀籠さんは温和しい人なんだ／あのまっすぐないい魂を／おれは始終おどかしてばかり居る／烈しい白びかりのやうなものを／どしゃどしゃ投げかけてばかり居る」という詩のなかの賢治は、「かま猫」をいじめる同僚の書記猫たちの一人なのである。賢治は「かま猫」をいじめる他の三匹の同僚の中に、自らを仮託しているのであろう。

佐野（1988）が、賢治がかま猫の「失策（どじ）ぶりを執拗なまでに書いてゆくやりかたは同情からはずれていて、これもまたひとつの宮沢賢治的なもののあるのであらわれなのである。」と述べているのは、このような点を感じていたのであろう。

「かま猫」のもう1人のモデルは、同じく同僚の奥寺五郎と考えられる。彼は学歴のハンディキャップがあったため、書記兼助教諭心得という立場で、4人の教員の末席に座っていたが、結核のために退職する。木佐（1990）は「銀河鉄道の夜」のカンパネルラに同僚の堀籠と奥寺の2人のイメージを投影させていると書いているが、同様に「かま猫」も、この2人の投影であろう。

また賢治は学校を官衙の類いとしても、認識していたとも思われる。未定稿の文語詩「職員室」の構成は、窓の外の景色、放課後とおぼしき職員室内の人々の様子、などを描く節があり、ついで「業を了へたるわかもの／官にあるは卑しくて／一たび村に帰りしに／その音づれも聞えざり」とある。そして、最後の節では校長が門を出てゆく光景で終わっている。この引用部分のような、職員室とは直接には無関係の若者のエピソードが入るのは唐突かつ不自然で、おそらく稗貫農学校の第一回卒業生で助手として採用され職員室のメ

ンバーとなっていた小野寺青年が、「官」を辞して帰郷したことを指しているらしい。これも事務所＝農学校という推定の傍証となろう。

また、この作品を賢治が執筆している際に、教育の世界を念頭に置いていたことは、ベーリング地方の猫の名として、トバスキーとゲンゾスキーがあることからわかる。『宮沢賢治語彙辞典』（原編、1989）にもあるように、両者は岩手県師範学校の教諭鳥羽源蔵（1872-1946）の姓と名とのもじりである。なお、未定稿の段階では、トバスキーとサダモリスキーになっており、同辞典には項目のないサダモリスキーは、盛岡高等農林学校教授の定盛兼助（1885-1958）の名からとられている。鳥羽は博物学、定盛は果樹園芸学の専門家で、ともに研究と教育に大きな貢献をした。鳥羽が賢治の発見したバタクルミの化石を東北帝大早坂助教授に知らせ、研究の機縁を作ったことはよく知られている。

この農学校の前身は、1907(明治40)年に郡立の蚕業講習所<sup>5)</sup>として発足して、1915(大正4)年に農蚕講習所と改称した、養蚕の技術の習得のための講習所であった。賢治が勤め始めた1921(大正10)年に、ようやく郡立稗貫農学校となったばかりであったから、郡役所の下部組織としての事務所のような性格もあったらしく、事務室と職員室とが同居していたという。つまり、もともと郡役所と稗貫農学校とは併せて第六番目の事務所であったともいえるのである。

この推論のもう一つの傍証として、新校本全集第12巻の校異篇に示されている、この作品の冒頭の部分の「猫どもが」と「事務所を建てて」の間に、賢治が記入しようとした語彙が挙げられる。すなわち「戸籍」→「蚕」(かきかけ)→「産業」→「戸籍」→「民事」と語を変えていたのである。途中、賢治が蚕業や産業に変えようか、と迷ったのは、モデルは郡役所であるとともに「蚕業講習所」の後身の農学校でもあることを示唆していると思われる。「第六事務所」は、郡役所の形態に、農学校の中身を入れたものと考えられるのである。

郡役所と農学校とを重ね合わせたとする推定

は、実はこの両者が不即不離の関係にあったことにも関係すると思われる。なぜならば、前述のように郡立の農学校であったため、賢治が着任した1921(大正10)年には、すでに郡制の廃止に関する法律が公布されており、1922年、1923年の二度にわたる府県制・市制・町村制の改正を経て郡役所が廃止になったのである。できたばかりの郡立の農学校もまた廃止の可能性があったのである。これに対して郡や県は同校の県立移管を図り、11年県会で可決、1923(大正12)年4月1日に移管された。その間、賢治も陳情書の作成や提出に関わり、校長を補佐して、農学校の存続と移転改築、県立移管のために努力していたことが知られている。「解散を命ずる」と申し渡されるという猫の事務所の運命は、郡役所のみならず農学校のそれとなる可能性もあったのである。

#### I-4. 「猫の事務所」の時空間的位置

作品における「猫の事務所」の時空間的位置をみてみよう。宇佐美(2001)は推敲過程の分析から賢治の創作意識の変化を捉えた優れた論考を提示しているが、時空間の問題にはほとんど触れていない。ここでは、宇佐美(2001)の表を簡略にして、「猫の事務所」の時空間的位置の表現からみてみよう。推敲過程を宇佐美は7段階に分けているが、これを筆者は4段階にまとめた。(表1)

第1段階の、ある時、途方もなく大きな黄色な野原にあったというのは、全体が漠としており、事務所をそんな所に置く必然性もなさそうにみえる。

第2段階になると、賢治は一転して明確な時空間を設定する。アフリカの大きな黄色な野原というのは、おそらくは最後に獅子を登場させるための伏線で、広大なサバナをイメージしたのであろう。また、この段階にのみ、「世界中の猫ども」のための事務所と、世界中が入っていて、アフリカという具体的な地名と対応し、ケニアあたりの乾季の黄色い草原の景観と、イーハトヴのオリザ、すなわち花巻地方の稲穂の稔るころの光景をダブらせたイメージである。また、紀元一千二百年という年代は、あまり深い意味は無さそうであるが、

表1 「猫の事務所」における時空間的位置表現の推敲過程

	空間的位置	時間	扱う仕事
第1段階	途方もなく大きな黄色な野原	ある時	戸籍
第2段階	アフリカの大きな黄色な野原	紀元一千二百年のころ	戸籍
第3段階	イーハストの野原	(記載なし)	地理や歴史 (戸籍)
第4段階	軽便鉄道の停車場の近く	(記載なし)	地理や歴史

戸籍などというものを扱う事務所であるから、きわめて古い時代のことではなく、しかも中南部アフリカへの侵略や植民地支配の及ぶ以前、となると中世のある時期ということになり、この年代が用いられたのであろう。

第3段階の「イーハストの野原」は、イーハトヴと書きかけてから直したらしく、賢治が岩手～東北をイメージしたイーハトヴとは異なる、もう一つの幻想空間を描こうとしたものらしい<sup>6)</sup>。賢治が、彼の造った「イーハトヴ」世界とは異質でありながら共通点もある、もう一つの異界を造ろうと試みた痕跡が「イーハスト」なのかもしれない。

第4段階に至って、ようやく事務所を置くに相応しい場所、すなわち「軽便鉄道の停車場の近く」に落ち着く。それまでの、どことも分からぬ、あるいは漠然とした土地で、しかも広い野原のまん中という不便な場所から、「停車場の近く」という妥当な場所になり、しかも軽便鉄道のある花巻の、しかも郡役所をイメージできる表記に変わったのである。軽便鉄道があるので当然、近現代の話となり、古い年代は消えたのである。

『春と修羅』のいわゆる第三集の「僚友」と題する、静かな、かつ哀感のこもった詩には、賢治の旧職場農学校によせる想いがある。詩は「わたくしがかつてあなたがたと／この方室に卓をならべてみましたところ」と始まり、後半には「昨日の安易な住所を慕ひ、／この方室にたどって来れば、」とあって、末尾は「…風も燃え 禾草も燃える…」と結ばれる。この「禾草」は「禾本科」の稲に違いない。このことは「猫の事務所」が草稿の段階で「大きな黄色な野原のまん中」と事務所の位置が書かれていることと、対応するのではないだろうか。

それは同じく『春と修羅』第二集の「清明どきの駅長」のなかに、「汽車は触媒の白金を噴いて／線路に沿った黄色な草地のリボンを燃やし／ことしの禾草に加里と燐とをやりながら」とあることから推定できるのである。

停車場の近くにあるとはいえ、花巻駅の次、町の縁辺部ともいうべき場所に郡役所はあったので、黄色に実った稲穂が草原のように揺れる田園地帯も近く、したがって、はじめは野原としていたのであろう。

「猫の事務所」の推敲過程を時空間的にみても、当初は郡役所がモデルであることをボカして漠然とした時空間とし、ついでアフリカの紀元1200年ころという遠い時空間を設定し、最後にはようやく身近な郡役所をモデルとしたことを窺わせるものとして、はっきりと寓意をこめたことが解るような設定に変えたのである。

## II 「かま猫」とは何か

### II-1. 岩手の「カマネコ」と俳句の「竈猫」

「カマネコ」という奇妙な語は、昭和10年代後半の岩手県では、日常、使われていた。その用いられ方には、筆者の（当時の山目国民学校、現一関市における）体験では、次の二種類の事例があった。一つは黒く顔を汚した者の形容で、習字の時間に顔に墨をつけてしまった同級生が、「カマネコ」みたいだと、皆にからかわれたことである。もう一つは、寒がりの怠け者の形容で、ストーブのそばに立っていて掃除をサボっていた同級生が、先生に「カマネコ」みたいなことをするな、と叱られていたことである。つまり、竈のそばや中で、煤で顔などを汚して惰眠をむさぼっている

猫のイメージで、なんとなく図太くて薄汚れた感じの猫であり、賢治の描いたひ弱な「かま猫」とはやや違ったニュアンスのものであった。

また、現代でも「カマネコ」は使われており、花巻市石鳥谷在住の高橋恵美子さんによれば、平成になってからも、口の回りに胡麻餡などが付いたとき、「カマネコみたいだ」とお祖母さんに言われたという。

毛藤(1994)は岩手県地域の「たとえ」の一つとして「釜猫のよう」という表現をとりあげ、火のなくなった竈の下にもぐりこんだ猫が、竈の灰と釜の尻の煤で全身が汚れた猫を釜猫といい、「真っ黒に汚れたさまを例えている」としており、これは筆者の二種の例のうち前者に当たる。

岩手県はじめ東北一帯で、かつては土間(ニワ)の竈には馬釜、羽釜、あるいは雑水(ジョミズ)釜などと呼ばれる大きな釜が常時かけられており、その釜に米の研ぎ汁や煮水などを溜めておき、馬の飼いばを煮るのに用いたのである。竈に釜が蓋のようにかけられていることから、その底の煤が付いて「かま猫」は黒く汚れるのである。

俳句の世界では季語として「竈猫」が生きている。この場合は「かまどねこ」と読み冬の季語となっている。

何もかも知ってをるなり竈猫 富安風生

この季語「竈猫」は富安風生のこの句から始まったという。句は、昭和8年から10年の間の句を収め、昭和12年発行の句集『十三夜』に載ったものという。(初出は筆者は未見、昭和22年発行の選句集『現代俳句新選』上村益郎編、富岳本社版などにも収められている。)そののち、次のような句がよまれている。

かまど猫家猫いよいよ去りがたし 鈴木渥志

しろたへの鞠のごとくに竈猫 飯田蛇笏

したがって、「竈猫」は、昭和10年前後に、季語として用いられ始めたものである。竈のそばなどにうずくまって暖をとる猫や焚き終わった竈の中の灰の上で寝る猫など、灰まみれででてきたりする猫を指すのである。外に灰猫、へっつい猫などという使い方もある。猫のかしこさ、横着さを示す

ことばと前掲の『新歳時記』(平井編, 1989)は述べている。その点は、岩手県での「カマネコ」のイメージに近い。

賢治が俳句からこの語を知ったわけではない。季語として使われる以前に「猫の事務所」が書かれているが、その逆に賢治のこの作品からヒントを得て季語が生まれたものでもない筈である。できるだけ短い語句を用いようとする俳人が、かま猫をかまど猫とするとは考えにくい。すなわち、かまど猫、かま猫など、呼び方や説明、色などに多少の違いはあるものの、日本各地でこの種の語が用いられていたことは確かである。

## II-2. 賢治の「かま猫」

賢治の「かま猫」は、筆者が少年時代に同じ岩手県の一関で聞いた「カマネコ」と、外観は似ており、黒い。それは季語の「竈猫」(かまどねこ)が、灰まみれで、そのため白い、のとは異なる。前節で述べた日本各地で用いられていた「竈猫」が白いのは竈の灰にまみれるからである。

一方、岩手の「かま猫」が黒いのは、釜の底の煤がつくからで、賢治は未定稿の段階で「釜猫」とも書いてもいる。黒い「かま猫」は竈に飼料(まぐさ)を煮るための大きな釜をかけておく岩手など馬産地の少数例なのである。

「かま猫」は夏に生まれたので皮が薄いため、寒がりの猫だという想定は、賢治の創作であると筆者は考える。これは、前述のようなカマネコと、夏生まれということ、賢治が結び付けて作ったイメージなのであろう。もちろん、猫はすべて寒がりであり、竈猫になるのは生まれた季節とは本来は無関係である。

かつては「夏児は犬も育たない」といわれていた。つまり、安産のシンボルのような犬も、夏生まれは弱く、無事に育てることは難しいというのである。衛生状態の劣悪な時代は、消化器系の伝染病などのため、夏は乳児の死亡率が高かった。かつては、夏生まれの子供は、常々、大人たち、とりわけ親から、このことを言われがちであり、それが一種の愛情の現れである揶揄であっても、



なにがなし引け目ないしは劣等感をもつ。それは、8月生まれである筆者も、このように大人にからかわれて、引け目を感じたことがある。賢治も8月生まれで、満6歳のとき、赤痢で入院し、以後、胃腸の弱い一生だったというから、同様の感情を持っていたに違いない。その赤痢を看病していた父親にうつしたことを、負い目としていたともいわれるから、夏生まれの辛さを「かま猫」に託したものであろう。本人の変えることのできない夏生まれという宿命を負うものとしての賢治自身は、ここでは「かま猫」の姿をとっているのである。

短編「猫」で語り手に賢治が語らせているように、賢治自身は「私は猫は大嫌いです。」というのが本音であったらしいが、猫、特に山猫は俗物的な性格をもつものとして、作品には多用している。山猫は、秋保美保(1977)がいうように、「どんどんと山猫」などに俗世間の代表的なキャラクターを持つものとして、登場している。賢治のよく使う山猫をなぜこの「猫の事務所」では用いなかったのであろうか。賢治は、野生の自由を持つ山猫に対して、同じくなかば野性をもちながらも、基本的には家あるいは人間に拘束される家畜としての性格をもつ家猫(飼い猫)を「猫の事務所」には登場させたかったのであろう。さらに「かま猫」という人間の道具の一つである籠がなければ生きてゆけないものを登場させ、後述のように獅子がただのライオンではなく、人間の作り出した家屋と関わりの深いキャラクターでもあるから、当然、家猫でなければならなかったのである。

「かま猫」が、「いじめ」に遭うという物語の着想は、岩手県地方において、「かま猫」という語が黒いものがついた者、薄汚れた人を揶揄する言葉であることから得たものではあろうが、これを寓話化するには、もう一つ、ヨーロッパの古典的童話の影響が考えられる。アンデルセンの「みにくいアヒルの子」のような、みかけが他と異なるものへの「いじめ」の話はよくあるが、この「かま猫」はグリム童話の「灰かぶり」の影響があると、筆者は考えている。同じような「灰かぶり」の話はフランスのペローにもあり、日本ではシンデレラ

としてそのペローの方の話がよく知られているが、賢治はグリム童話に親しんでおり、ドイツ語か日本語訳で、アッシュエンプツェル(灰かぶり娘)を知っていたであろう。継母とその娘たちのいじめに遭うアッシュエンプツェルは自分の寝床が無く、籠のそばで灰のなかで休んだので、いつも灰だらけで汚いため、こう呼ばれていたのである。

「灰かぶり」は顔や体を洗い、豪華な衣装をつけると、美しい姫に変身する。「かま猫」も、同じはずである。にもかかわらず、「猫の事務所」の物語は「かま猫」は汚れた「かま猫」のまま終わる点は全く異なる。「灰かぶり」になったのは「いじめ」の結果であるのに対して、「かま猫」は汚れていることも「いじめ」を受ける一因であるらしく、したがって汚れを洗い落とさないままにしないと物語にならないのである。

すなわち洗えば「かま猫」から普通の猫になるはずなのに、まるで取れない汚れのように書いている点に、この話の無理な設定があるといえる。しかしながら、次章で述べるように、賢治にとっては、獅子を「かま獅子」として登場させるためには、「かま猫」のままの物語とする必要があったのである。

### Ⅲ 「獅子」とは何か

#### Ⅲ-1. なぜ獅子がクライマックスで登場するかという問題

なぜ獅子がクライマックスで登場するかという問題は、この作品の最大の謎である、とされてきた。話の最後における獅子の登場は、執筆過程の最初から予定されていたものであることは、初期形原稿のなかに、「猫の事務所」をアフリカの草原にあるものとして話を始めようとしたものがあることからわかる。そして、寓話というからには、この獅子の突然の登場には、何らかの寓意がこめられているはずである。つまり獅子になんらかの寓意が秘められていると考えるべきである。

筆者は、従来、有力とされていた獅子座説と師子王説とを検討してみた。前述のように賢治は8

月1日獅子座の生まれである。なお、堀尾(1991)は8月27日生まれが正しいというが、賢治自身も履歴書に8月1日生まれと書いている。詩「原体剣舞連」などに「獅子の星座に散る火の雨が…」などとうたい、星座に詳しい賢治は、自身が獅子座生まれであることを知っており、獅子を自分と関係の深いものであると信じていたのではないかと考えてみたが、これだけで獅子の突然の登場と権力の行使とを説明することは難しい。

また、賢治の尊敬する田中智学は日蓮主義にたち、自らを「師子王」と称した。「師子王」は「獅子王」と同義ではあるが、仏法に適うものとして、けもの偏を取っている。その「師子王」にヒントを得たということも有り得るが説得性に欠ける。

吉田(1997)は賢治の動物が登場する作品を通して、「賢治自身の風貌にもっとも近いものがライオンや山猫」であるとし、「賢治はライオンでもある」と述べている。そして「賢治の中にときおり現れるライオンの風貌は、衆愚への愛憐や侮蔑や憤怒や、献身への当為の脅迫によって時折苦痛に歪むのを、私達は知っている。」と記した。さらに吉田は、「猫の事務所」の獅子をとりあげ「あの超絶権力はいったい何であるのか」と疑問を呈している。衆愚への憤怒などという範疇を逸脱しているからである。

このような超絶権力については、木佐(1990)が、デウス・エクス・マキナ(最後に登場して難題を解決する絶対者)の存在を「氷河鼠の毛皮」や「注文の多い料理店」に見いだして興味深い議論を行っているが、この「猫の事務所」における獅子も、一見、まさに極めて明快なデウス・エクス・マキナであるように見える。また、小沢(1964)は「猫の事務所」の獅子を絶対者とし、小沢自身はそのような絶対者による解決を好まない、と感想を述べている。

しかし、本当に獅子はデウス・エクス・マキナないしは絶対者なのであろうか。あるいは心理学でいう「超自我」、自分の心の中にある自分を超える存在なのであろうか。

獅子とかま猫とは、ともに作者・宮沢賢治の分

身であり、相補的な役割をもち、この物語を調和のとれた形で締めくくるために必要な存在だったのであろう。そうであればこそ、語り手として賢治は、獅子の判断に対し「ぼくは半分獅子に同感です。」と結んでいるのである。この「半分」には、獅子の発言の内容のことと、作者賢治の立場のこととの双方が含意されていると、筆者は考えた。作者賢治の立場というのは、賢治は職を失うであろう猫たち、彼らは「堀籠さん」の心を傷つけた賢治自身の投影でもあり、そのいじめ役の猫たちとも、一部の感情を共有しており、後の半分は猫たちへの同情なのである。

しかし、最後に登場するのが、なぜ「獅子」であるのか、はこれだけでは説明できない。むしろ猫の長老とか、猫の長官などといったものでもよいはずである。

私は獅子とかま猫との間になんらかの関係があることを作品から読み取ったので、その点からの考察を次のⅢ-2において説明する。

さらに「猫の事務所」が当時の日本の中央による地方支配の末端の機関であった郡役所をモデルとしているならば、その運命を左右する権力は中央政府、とりわけ内務省にあったのであり、その点をⅢ-3以下において明らかにしたい。

### Ⅲ-2. 「竈獅子」説について

これまで、この作品の最後に獅子がなぜ突然、登場するのかが謎とされてきた。ここではその解として、まず筆者がかつて提唱(米地,1996a)した「竈獅子」説を提示する。

江戸時代には、竈獅子(かまじし)という季語があった。巢兆に「竈獅子が頤(あご)ではらひぬ門の松」という句があり、一茶にも「かま獅子が腮(えら)ではらひぬ門の松」という殆ど同じような句がある(『近世俳句大索引』1959による)。すなわち、獅子舞が竈獅子だったのである。獅子舞はその年の竈祓いとして、家内安全や火伏せ(火災予防)を祈ったものであり、獅子は神そのものか、神の代理者として舞い、太神楽ともいう。したがって獅子舞そのものを竈注連(かまどしめ)や竈祓

とも呼んだ。昔は獅子舞が竈の前で舞い、近年まで京都付近ではこの慣習が残っていたという。

では、花巻付近では、どうだったであろうか。実は花巻付近は、獅子舞の特に盛んな地方で、賢治はその獅子舞に強い関心を寄せている。この地方の獅子舞は、普通、権現舞と呼ばれ、山伏神楽の系統の早池峰神楽の中心的な舞いで、やはり火伏せのために舞われる。獅子舞いの獅子も、それに用いる獅子頭も、ともに権現さまと呼ばれ、神仏が人間の目に見える姿をとる、いわば仮の姿、すなわち「権現」なのである。

賢治が神楽に関心を寄せていたことは、多くの作品から知られる。例えば、劇「種山ヶ原の夜」のなかには、樹木の霊たちに「…権現さんも踊るとごだないがべちゃ」とか「権現さん悦ぶとどほんとに面白いな。口あんぎあんぎど開いで…」と神楽の話を見せている。また、「風の又三郎」にも、又三郎が「まるで権現さまの尾っば持ちのやうにすまし込んで…」先生のあとについてきた光景が描かれている。

詩「雪峽」のように「あやしくも鳴るや み神楽 いみじくも鳴るや み神楽」と神楽そのものが描かれたり、短歌に「山上の木にかこまれし神楽殿…」神楽殿のぼれば鳥のなきどよみ…」と神楽堂が歌われたりもしている。文語詩「丘」に歌われている神楽殿が、現在、賢治記念館のある胡四王山の山頂にあった神楽殿であることは、佐藤(1987)によって考証されている。賢治の愛したこの神楽殿で舞われる胡四王神楽も早池峰神楽岳系のもので、慶長3年の年号の記された古い獅子頭が伝えられており、花巻地方の祭典に舞われるが、正月3～5日に氏子各戸を廻る権現舞が春祈祷と称する重要な年中行事になっている(花巻市教育委員会,1985)。この権現舞は、火伏せや家内の安全などを祈るものでもある。家々では権現舞の一行に御祝儀として金を包んだり、米を贈ったりした。

獅子が「猫の事務所」の中に登場する場面で、頭がポイントになっているのは、この獅子頭(権現様)がイメージされているからにはほかならない。

すなわち、初期形では「窓の向ふにいかめしい獅子の立派な頭がありました」立派な頭を有った獅子もほんたうにかあいさうです」とあり、雑誌発表形でも「いかめしい獅子の金いろの頭が見えました」となっている。頭以外の部分については書かれていない。つまり、獅子は獅子頭なのである。

花巻を含む岩手県北部から青森県東部にかけての、旧南部領では、上記のように権現舞と呼ばれる獅子舞が行われている。これに対して、岩手県南部から宮城県にかけての、旧伊達領では、竈神(かまがみ)という木製または土製の恐ろしい顔の面が、土間(ニワと呼ばれる)竈の上にあたる柱に掛けられ、火伏せを初め、魔よけ、盗難よけ、ほか家に安全と繁栄をもたらすものとされている。竈神を祭る慣習は、宮城県北～岩手県南の伊達領北部に特に盛んであり、カマオトコとも呼ばれる醜男の面が掲げられている。しかし、醜男面の外にも、鬼の面、天狗面など様々な面のものである。なお、このカマダガミはカマジンと呼ばれることもあり、賢治作品にネズミなどの敵国として出てくる造語・カマジン国の名の由来と考えられる。

竈神(かまがみ)はしばしば釜神と書かれる。「釜」は現在では茶釜、飯炊き釜などを指すことが多いが、もともとは竈を呼ぶ言葉であったらしい。その竈(釜)にかけやすいように、深くして鏝を庇のようにつけた鍋をも釜と呼んだのである。竈は家の中心と考えられており、それゆえ、家が倒産することを「竈をかえす」といったり、家の主人として一家の中で思うままに振る舞う権力者を「竈將軍」と呼んだりした。

その伊達領に接する南部領一帯にも、いつのころからか、このような竈神を祭る習慣が浸透してきたものらしい。新長(2004)の調査によると、いわゆる「かま神」の北限は少なくとも花巻市石鳥谷地区で、かつ神楽面様であるという。この地方では、迦具土神とも呼ばれ、お面か火伏せのお札が掲げられている。多くの場合木のお面を「かざり申して」あるいは「あげ申して」祭るのであるが、泥のお面を初めから壁に塗り込める場合も

あるという。花巻付近では、男の面のほか、女面も多く、その家の人が彫る場合が主であったという。しかし、権現さま、すなわち獅子頭を竈の上に祭る家もあり、それらは概ね旧家や富裕な家であった。例えば花巻市大迫町の旧家村田家（屋号村喜）では、毎年12月に迦具土神としての三宝荒神と権現様つまり獅子頭を床の間に飾って、親類縁者を招き、いわゆる竈祭を行っている。この権現様は、神楽を継承する集落の人々が、木を材料に鉋を用いて獅子頭を彫り、農閑期に花巻など稗貫地方を廻って、売ったり、米と交換したものであるという<sup>7)</sup>。

大償（おおつぐない、地元ではオンツグナイと呼ぶ）は、岳（だけ）とともに、いわゆる早池峰神楽の中心集落であり、賢治の詩「山火」（作品第八六番）のなかに「古代神楽を傳えたり／古風に公事をしたりする／大償や八木巻への／小さな森林消防隊」とある。「森林消防隊」の語には火伏せの獅子舞いの意味も籠められているのである。また八木巻も神楽を伝承する集落で、大償の弟子神楽といわれるものの一つである。この早池峰の有名な神楽のほかにも、獅子舞をもつ神楽は、この地方一帯に広く分布していた。

これらの神楽は、獅子頭を奉じて町や村を巡って家々を訪れ、家内安全、特に火伏せの舞を竈の付近で舞うのである。

竈神の面を竈獅子として祭る事例を記しているのは、柳田国男監修・民俗学研究所編『改訂総合日本民族語彙』第一巻、1955.平凡社.477.の396ページのカマジシの項で、次のような記載がある（執筆直江廣治）。

竈獅子。土間の竈の上に掛けてある竈神の面をいう。宮城県柴田郡で見られる竈獅子には、二尺に一尺五寸もある素人作りの木の面で、恐ろしい顔をしたものがある。目は金物、毛は馬の毛、その上に竈注連を張ってあるというが（民俗学三ノ一）、現在は特別の祭はせぬようである。（後略）

獅子舞と竈神とは、同じ御利益をもつものであったから、両者の重合したかたちで、竈神とし

ての獅子頭が生じたのであろう。かくして、「猫の事務所」の獅子は獅子頭であり、竈神でもあったと、理解できるのである。

「猫の事務所」の最後に獅子が登場する不自然さを、作者の賢治が気にしなかったのは仕方ないとしても、寄稿誌の編集者は不自然に思わなかったのだろうか、という疑問が生じる。竈神としての獅子頭を知らない読者には、獅子の意味が理解できないことは、容易に気がつくと思われるのにも拘わらず、なぜ、そのままにしたのであろうか。その疑問は前掲の宮城県柴田郡の竈神としての竈獅子面で解ける。賢治が「猫の事務所」を寄稿した雑誌『月曜』は尾形亀之助が編集した随筆雑誌である。尾形は宮城県柴田郡大河原町の出身で、たまたま、その柴田地方にも竈獅子を竈神として祭る風習があったので、尾形自身はこの賢治のかま猫の話に登場する獅子が竈獅子であることを、すぐに理解したものであろう。岩手県中部と宮城県南部という、ほぼ150kmも（竈男を祀る地域を挟み）隔たった地域に同じ竈獅子を祀る地域があり、それぞれが作者賢治と編集者尾形との出身地であったという偶然が、この謎ともみえる不自然なストーリーを、そのまま疑問も抱かずに印刷発行する結果になった理由の一つと思われる。

なぜなら、いうまでもなく、竈を生存の拠りどころとするかま猫にとって、竈神である獅子（頭）は、いわばその世界を統べるものであり、守護神でもある。この両者の関係を知る者にとっては、獅子の登場は不思議ではないのである。

なぜ獅子がすこしの間事務所のなかを見ただけで、事情を洞察し得たのか、という疑問も、常に竈の上にあつて家を守る獅子すなわち権現には容易なことと考えてよい。竈神の祭られる壁面は、土間を挟んで「火びと」と呼ぶ炉に対して、炉の正面は横座（主人の座）で、横座に向かって右が「かか座（女座）」、左手が客座である。コの字型に、ちょうど「猫の事務所」の書記のように配置した全員を、竈神は見下ろしているわけである。

竈神としては獅子頭を飾るのは少数例で、多くは竈男面を掛けるのであるが、その場合でも竈の火伏

せに獅子舞は巡回するから、獅子がかま猫の守護神なのである。なぜ獅子の登場をみて四匹の猫がおろおろするだけなのに、かま猫は泣くのをやめてまっすぐに立つのか、という疑問も、自分の守護神・獅子の登場に、かま猫がシャンとするのは当然のことと理解できる。「風の又三郎」にある「まるで権現さまの尾っぽ持ちのやうに…」していたという描写がここにも当てはまるのであろう。

この竈獅子との関係で竈猫が登場する、と考えると賢治が「かま猫」というキャラクターを用いた理由もわかるといえる。賢治が「かま猫」などという後天的な性質のものを、黒猫、白猫、虎猫、三毛猫などと同列に並べたのはいかにもおかしいようにみえる。ぶち猫とか、赤猫なども考えられるし、もし後天的なものを考えるなら、なにか明瞭な障害をもつものとするのができたはずで、体を洗えばもとの姿になるはずの「かま猫」という設定は不自然なのである。しかし、「かま猫」を使った賢治の意図は、実は「かま獅子」の登場の伏線とすることだった、と考えると取えて不自然なキャラクターを用いたことも理解できるのである。

### Ⅲ-3. 獅子＝「浜口ライオン」説

「竈獅子」説は「かま猫」との関係からみても、蓋然性が高い。しかし、寓話というからには、もっと痛烈な寓意もこめられていそうである。そう考えた筆者は、当時の世相と郡役所との関係から、この作品執筆時の大蔵大臣浜口雄幸こそ獅子であったとする新しい考えをいただき、これとさきの「竈獅子」説との重合と推定した<sup>8)</sup>。

浜口雄幸（はまぐちおさち、1870-1931）は、1924（大正13）年6月11日に組閣された第一次加藤内閣に蔵相として入閣し、1925（大正14）年8月2日組閣の第二次加藤内閣においても蔵相として留任し、さらに1926（大正15）年1月30日組閣の若月礼次郎内閣にも蔵相として入閣した。同年6月の内閣改造で内務大臣に就任するまで、2年間大蔵大臣を勤めたわけであり、その間に賢治の「猫の事務所」が執筆されていることになる。そして浜口が郡役所を所掌する内務大臣になった直後に

郡役所が廃止されている。

財政通で知られた浜口のあだ名は、その風貌からライオンであった。彼のこのあだ名がいつころからかについては諸説があるが、既に旧制第三高等学校生徒時代からあったとも、大蔵官僚時代からともいうが、のち浜口ライオン首相などと呼ばれる以前から彼はライオンのあだ名をもつ政治家であった。緊縮財政を唱え、実行力のある政治家として人気があったライオン蔵相浜口雄幸こそ、獅子のモデルであった。

「猫の事務所」には「いかめしい獅子」の頭とか、「獅子が大きなしっかりした声で」云うとか、書かれているが、『濱口雄幸傳』（小柳津編、1931）にある友人中島滋太郎の浜口演説を評するという「音吐朗々、言句の莊重、風采の魁偉、態度の端然たる名演説」ということと相応しているし、やはり友人の牧田環は浜口が「厳肅な顔」と「声のよさ」とを持つことで得をしている、と述べている。また同書には浜口雄幸自身も自らの特徴として「声大きい」ことをあげている。

郡役所の廃止については、明治中後期から論議されており（谷口、2004）、郡廃止に至る過程も、廃合にとどめようとする内務省と、全廃を主張するいわゆる護憲三派との対立など、複雑であった（谷口、2006）が、結局、浜口が蔵相になる以前の1921（大正10）年4月に原内閣が「郡制廃止ニ関スル法律」を公布し、さらに1923（大正12）年度末に山本内閣のもとで郡制は廃されているにもかかわらず、郡役所は3年余りも残っていたという、きわめて変則的な状況が続いていた。世直しの期待を浜口ライオンにかける国民も多く、彼の蔵相～内相時代に郡役所が廃止されたのも、浜口の緊縮政策の一環として当然であった。中途半端な形で残っていた郡役所に止めを刺したのが浜口であった。

『濱口雄幸傳』（小柳津編、1931）は、浜口の蔵相時代の功績として、まず行政および財政の整理、行政機関の改廃、軍備の整理、などを挙げ、行政機関の改廃の内容として（一）農林商工両省の分省、（二）営繕管財事務統一、（三）郡役所の廃止、を挙げている。波多野（1993）は蔵相から内相に

転じて、党内で論議されてきた政策を次々と断行した、として郡役所の廃止、郡役所に伴う新旧選挙法の改正、健康保険法、警視庁官制の改正、道府県制改正、市町村制改正、労働争議調停法、を挙げている。郡役所の廃止を蔵相としての功績とするか内相としての成果とするかはともかく、郡役所廃止が浜口によって実施された、ということは確かである。

獅子の「やめてしまへ」は、郡も無いのに郡役所が存在していることに対する人々の疑問や批判に応えた浜口ライオンに対する賛意を寓意するものであった、と考えられるのである。

「猫の事務所」を訪れた猫として最初に登場するのは氷河鼠を食べるためにベーリング地方へ行きたいという「ぜいたく猫」である。浜口蔵相は贅沢に対して厳しく、1924(大正13)年7月の国会における財政計画方針に関する演説の中でも「国民も戦時好況時代から馴致せる軽佻奢侈の気風を一掃し」克己節約に努めなければならない、と述べている。(『濱口雄幸傳』)「ぜいたく猫」の登場は浜口ライオンの「やめてしまへ」の伏線だったのである。

また、「猫の事務所」の仕事である「地理」や「歴史」に関する問い合わせや回答のなかに、ベーリング地方(草稿ではシベリア地方、ほかにウラジオオなどの地名もある)やヤップ島の名も登場する。前者は日本軍のシベリア出兵(1918~1922)と関わり、後者は第一次大戦への参戦後直ちに日本艦隊が出撃し接収した南洋諸島(大戦後の1920年日本の委任統治領となる)の戦略拠点である。日本軍の海外進出と関わるこれらの地名が出てくることは、単に時の話題の地であるということばかりではなく、獅子の「やめてしまへ」が、軍備の整理縮小を主張してきた浜口に重ね合わせたものと読み取ることができるのである。

当時の人々には、獅子=ライオン=浜口蔵相と連想がすぐにできたものであろう。のち首相となった浜口は、国際協調や軍縮に力をそそぐ(川田、2004など)。しかしながら浜口は東京駅で1930(昭和5)年11月14日、暴漢に狙撃されて重傷を負い、

それがもとで翌年8月に死去するという激動の時代の中で、緊縮財政も期待ほどの効果はあげられないまま、獅子の寓意するライオン蔵相のことは次第に忘れられていったのである<sup>9)</sup>。

1926(大正15)年3月に「猫の事務所」は『月曜』誌上に発表される。賢治はこの狙撃と死去とを予知していたかのように、発表以前のいわゆる初期形の末尾はこう結んでいる。「立派な頭を有(も)った獅子も実に気の毒です。／みんなみんなあはれです。かあいそうです。／かあいそう、かあいそう。」普通に読めば、獅子が気の毒とは、感じにくい作品であり、この部分はあるいは浜口の遭難後にも推敲を続けたとすら思いたくなるのである。

すでに業務を終えた郡役所を閉鎖するライオン蔵相の側に、もちろん賢治も賛意を示しつつも、その郡役所に勤めていた書記たちの前途はどうなるのか、なども考えて、賢治はそちらへも半ばは同情したのであろう。

## おわりに

「かま猫」という語は賢治自身の独自に造り出した語であると考えられる論者(原、1990)もいるが、この語が岩手県各地で用いられていたものであることは明らかであり、それを手掛かりに筆者は「猫の事務所」の中に盛り込まれた賢治の想いやメッセージを探ってみた。それは、農学校に働く(勿論、賢治も含めた)人々の世界をモデルとし、花巻の町の郡役所の廃止などの俗な問題、『月曜』の前作「ごしき童子のはなし」にも通ずる「かま猫」や「竈獅子」などの民俗的世界をオーバーラップさせ、遠くアフリカなどへも広がる世界のいわば中心であるイーハトヴを舞台として描く、という四重の構造を明らかにするものであった。(表2)

しかしながら、最後の「やめてしまへ」という獅子の決定的発言には、さきに示した「浜口ライオン」が最も強く反映したものであると考えられるが、「竈獅子」と「釜猫」という土俗的世界や、賢治の内面世界とも関わるものでもあったのであろう。

表2 「猫の事務所」における物語とその背景との四重の構造

	場所	主人公	最後の登場者	テーマ
「猫の事務所」のストーリー	猫の事務所	かま猫	獅子	職場のいじめ 事務所の廃止
背景の重層的世界 政治・社会的世界 民俗・民話的世界 賢治の内的世界	郡役所 民家 農学校	書記たち かま猫 同僚と賢治	浜口ライオン内相 竈獅子 賢治の分身	郡役所廃止問題 竈をめぐる民俗 職場のいじめ

農学校時代が、相対的には賢治にとって幸福な時代であった。しかしながら賢治は辞める。彼が農学校を辞める気になったのは、次の段階すなわち羅須地人協会設立のためという発展的な目的によるものではなく、むしろ辞めることそれ自体が先にあったらしいのである。そのことは、辞職後東京へ出るプランをもったこともあるとか、辞める前年の12月の弟清六にあてた手紙に、校長が変わったりして、義理で辞めなければならない、などとあることから分かる。その辞職の原因が農学校の側などにあるというような外因によるものか、実践への願望や宗教的使命感などの内因によるのか、という点についての飛田三郎の問に、宮沢清六が「遠因あり、近因ありでしょうか」と答えたという（飛田、1969）。農学校を辞めるか否かと迷う賢治の、揺れ動く心情が作品の各所に滲み出ているのではないだろうか。そしてそのような自分に対し、もう一人の自分が獅子の姿を借りて「やめてしまへ」と決断を下す。さきに挙げた詩「僚友」には「やめて」しまった賢治の、俗っぽく言えば「未練」が窺われる。辛く淋しい決断は、もう一人の自分である獅子がせねばならなかったのである。その「未練」は「懐かしさ」と同じ根をもつ。退職一年後の賢治の詩には、その旧職場が「ノスタルジア農学校」の名として登場するのである。

作品末尾の〈かあいさう、かあいさう〉が削除された理由については、こう考えたい。人々自身を作り出した組織ないしは社会というものの中にはめ込まれた人々の「業」、それを賢治は他者に見るばかりではなく、自分自身の中にも見いだし

ていたであろう。この作品に登場するキャラクターは、すべて賢治の分身といえるのではないだろうか。いじめに遭う弱い立場のかま猫も、いじめる側の猫たちも、その書記猫たちの讒言をまに受けてしまう事務長猫も、これらの猫たちの営みや振る舞いに中止を申し渡す獅子も、すべて賢治自身の投影であるとともに、彼の周辺の人々の投影でもあったろう。そのような矛盾や人格の分裂に悩む賢治自身の言葉が、これらすべてのキャラクターに対して初期形では「みんなみんなあはれです。かあいさうです。かあいさう、かあいさう。」と言わせたのであった。けれども、賢治はその賢治自身の思いが読者には伝わらないであろうことに結局は気づき、この初期形の結びの部分のカットしたのである。

しかし、それでも結びについては「獅子という外的な権力による事務所の解散が何ら解決をもたらしていない」(中村、1994) ために「ぼくは半分獅子に同感です」という留保を付けなければならなかったとする中村のような考え方がある。中村の、この作品の「欠陥は獅子によって事務所が解散させられることにある」という指摘は、前述の小沢の思いと共通しており、大方の意見でもあるといえよう。

この作品に大きな欠陥があるとすれば、それは獅子を多義的に捉えることの難しさにあり、賢治は敢えて多様な解釈の余地を残し、寓話として読者にそれを読み解くように謎を提示したままにしたことであろう。ただし、これを欠陥とみるか、魅力とみるかは、評価の分かれるところであろう。

外的な権力すなわちライオン蔵相を読み取らせ

るような表現でもあり、獅子頭とかま猫という民俗的な世界としても読み得るものであり、さらには、賢治の内面世界を伝えるものでもあった。

賢治の内面世界の獅子は、皆を見守り、時には辛い決断をせねばならぬ家父長的な竈神「権現様」であり、外的というよりは内的な存在、すなわち心の中の葛藤や煩悶に苦しみ、それでも何らかの決定を強いられる部分をこそ象徴する存在なのであったと、考えられる。この家父長制に対する賢治の思いは、初期短編の一つとされる「家長制度」にもみられ、形を変えて作品に現れているのである。

「猫の事務所」執筆のころ、賢治はまだ満三十歳にもなっていなかった。筆者には、若き賢治の描いた「猫の事務所」のすべてのキャラクターへの思い、すなわち賢治の自らや他者に対する思いこそが、哀れに思われ、「かあいさう」な賢治へのいとおしさのようなものさえ感じるのである。

「猫の事務所」は、重層的な構造を持つ作品である。中央と地方との関係の行政ないし政治的問題、岩手県中部の民俗的世界、事務所（学校）の人間関係と賢治の内面的世界…等々の重なりあった作品で、早池峰神楽の聖なる世界、国民を統べる政治的世界、そしてまた農学校という職場にあった賢治の心の中の苦渋に満ちた世界の投影なのでもあった。そして他方、これを寓話として、自分や周囲の人々を客観的に捉え、人の心の脆さをも見据えた、ほろ苦いユーモアのある優しくも鋭い賢治の「まなざし」がある。

この作品の重層的な構造を簡略に示すと、表2のようになるであろう。宮沢賢治がどのようにこの作品を創りあげたかについて、筆者はこう考える。

まず第一に、郡役所の廃止とそれを実施したライオン浜口雄幸蔵相～内相の存在とが、賢治に「猫の事務所」の構想を抱かせたのであろう。次にライオンに解散を命じられる対象としては、同じネコ科の猫が妥当と賢治は考え、猫と獅子との関係を土俗的世界の竈獅子と竈猫との竈によって結ばれた関係として描くことにしたのである。さらに解散を命ずる理由として、賢治自

身が農学校の教員として感じていた職場における「いじめ」的な出来事などをもとに誇張して描いたのである。このように「猫の事務所」は架空の猫の世界の物語ではあるが、当時の世相、政治的状况をテーマとしながら、地域の民俗に根ざしたキャラクターを描き、自身の生活態度への自省をも取り込んで、いかにも賢治らしい豊饒な作品としたのである。

## 謝辞

本研究にあたり注4)・7)に挙げた方々や木村清且氏はじめ久慈設計花巻設計事務所の方々など花巻地域の多くの皆様のご教示、ご協力を得たことを記し、これらの皆様に厚く感謝申し上げます。

## 注

- 1) この作品の題を「寓話 猫の事務所」とする論者もあり、例えば賢治の全童話を解説した雑誌に寄せた安藤(2003)の文がその例であるが、その安藤の書いた文は同誌の五十音順に配列した全童話作品のなかでナ行に置かれ、編集者は「猫の事務所」を題としていて安藤の考えは採用していない。『月曜』本文では「寓話」と「猫の事務所」とは行が違うのみならず、前者は3号、後者は8ポと活字の大きさも異なり、前者はジャンルを示し、題名には入らないとみるべきであろう。最近の例では、米村(2007)も「猫の事務所」のみの形を題名としている。
- 2) 1～3については続橋(1980)、4～6については続橋(1985)から取り上げた。
- 3) 古代以降用いられてきた郡は旧国と同じく、いわば単なる地域名であったが、この新しい郡は従来とは異なり、国による直接の地方統治の末端として設けられ、郡役所がその任に当たるものとして設置された。すなわち、単なる地域名でもなく、また地方の自治体でもなく、国の出先の機関による地域の直接統治の再末端の単位であった。
- 4) 東村山郡役所については、1881(明治14)年に天皇行幸の際の書類により、当時の内部の間取りや各室の役割が記録に残っている(佐藤巧編、1986など)。なお、この調査には附田治雄館長はじめ旧東村山郡役所資料館の皆さんのご協力を得た。
- 5) 熊谷(1968)は花巻里川口役場において、養蚕教育の必要性を考え、養蚕伝習所を設けた、としている。
- 6) 賢治は「イーハトヴ」を「イーハトーブ」「イーハトーヴォ」など様々な表記で書いているが、トをトーと延ばすか、



- ヴをブと書くか、最後に o をつけてヴォないしボにするか、などの微修正を行っているだけである。これに対して、「イーハスト」は「イーハトヴ」の後半を思い切って変えている点で他に例のないものである（米地, 1996b）。「…スト」という語尾は「イーハトヴ」と同じく、外国地名からの借用であろう。つまり「イーハ」は「イーハトヴ」「イーハスト」に共通で、語尾が各々「…トヴ」と「…スト」となる。「…トヴ」がロシアのサラトフ Saratov や ロストフ Rostov などに似せて -tov を付けたものであるのに対し、「…スト」の場合は、ハンガリーのブダペスト Budapest や、ルーマニアのブカレスト Bucharest などに似せて -st をつけたのであろう。
- 7) これらの点については、藤原隆男岩手大学名誉教授や1992年度の花巻市生涯学習都市NHK放送大学の「日本の自然」受講生の方々、花巻市立早池峰博物館一ノ倉俊一館長、大迫の村田家（屋号村喜）の皆さんなどの各位からのご教示を得た。また、『花巻市史（民俗篇）』（熊谷, 1967）も極めて有用であった。
- 8) なお、賢治は恩師関豊太郎教授とともに稗貫郡役所の依頼の土性調査を行ったが、その間に気性が激しくライオンとあだ名される同教授（藤根, 1996）が、郡役所の吏員の言動に対して厳しい発言をしたこともあり、そのことも賢治が連想した可能性はある。しかし、やはり廃止という重大なことに関わった浜口ライオンが主たるモデルであろう。
- 9) とはいえ近年は、城山三郎（1980）の小説『男子の本懐』（新潮社）や川田（2004）の著書などにより浜口の業績が再評価されている。

## 文献

- 秋保美保（1977）宮沢賢治・どんぐりと山猫, 国文学, 27-12.
- 安藤英方編（1959）近世俳句大索引, 明治書院.
- 安藤宏（2003）寓話 猫の事務所, 国文学, 48-3.
- 飯島吉晴（1978）竈神の象徴性, 民族学研究, 42-2.
- 岩手県（1963）岩手県史 第8巻（近代篇 3）, 杜陵印刷.
- 岩手県（1965）岩手県史 第10巻（近代篇 5）, 杜陵印刷.
- 上村益郎（1947）現代俳句新選, 富岳本社.
- 宇佐美真（2001）宮沢賢治「猫の事務所」論－推敲過程が意味するもの, 宮沢賢治, 16.
- 小倉豊文（1957）解説, 「セロ弾きのゴーシュ」, 角川文庫.
- 小沢俊郎（1964）つらい「豚」の話, 四次元, 昭和39年7月号.
- 小沢俊郎編著（1975）賢治地理, 学藝書林.
- 川田稔（2004）激動昭和と浜口雄幸, 吉川弘文館.
- 黄川田啓子（1970）竈神信仰の研究, 東北民俗, 5.
- 木佐敬久（1990）宮沢賢治とシベリア出兵 1・2, 天秤宮, 一・二.
- 熊谷章一（1967）花巻市史（民俗篇）, 花巻市教育委員会.
- 熊谷章一（1968）花巻市史（近代篇）, 花巻市教育委員会.
- 毛藤勤治（1994）北東北のたとえ, 岩手日報社.
- 小柳津五郎編（1931）濱口雄幸傳, 濱口雄幸傳刊行会.

- 佐藤勝治（1987）賢治と胡四王山－初恋の詩「丘」解説－, 「やさしい研究 賢治文学のよろこび」第二集.
- 佐藤巧編（1986）旧東村山郡役所保存修理工事報告書, 天童市.
- 佐野美津男（1988）宮沢賢治の童話を読む, 辺境社.
- 新長明美（2004）かまど神と「はだかかべ」, 日本経済評論社.
- 谷口裕信（2004）明治中後期における郡制廃止論の形成, 史学雑誌, 113-1.
- 谷口裕信（2006）郡の改変過程にみる近代日本の地方編成, (2005年度博士論文要旨) 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科, HP, 学術データベース.
- 続橋達雄（1980）賢治童話事典「猫の事務所」, 佐藤編「宮沢賢治必携」別冊国文学, 6.
- 続橋達雄（1985）寓話「猫の事務所」考, 国学院大学栃木短大紀要, 19.
- 続橋達雄（1992）修羅から菩薩へ－宮沢賢治の法華信仰, 大島宏之編「宮沢賢治の宗教世界」, 北辰堂（宗教公論, 1956年, 12月－1957年2月, 宗教問題研究所から転載）.
- 飛田三郎（1969）肥料設計と羅須地人協会（聞書）, 草野心平編「宮沢賢治研究」, 筑摩書房.
- 中村稔（1994）宮沢賢治ふたたび, 思潮社.
- 波多野勝（1993）浜口雄幸 政党政治の試験時代, 中央公論社.
- 花巻市教育委員会（1985）花巻市の郷土芸能, 同委員会.
- 原子朗編（1989）宮沢賢治語彙辞典, 東京書籍.
- 原昌（1990）賢治とL・キャロル, 児童文学世界, '90年秋号.
- 平井照敏編（1989）新歳時記（冬）, 河出書房新社.
- 藤根研一（1996）ライオンとの出会い－宮沢賢治と盛岡高等農林学校－, 農業普及（岩手県 農業改良普及会）, 48-2.
- 堀尾青史（1991）年譜 宮沢賢治伝, 中央公論社.
- 吉田美和子（1997）宮沢賢治 天上のジョバンニ 地上のゴーシュ, 小沢書店.
- 米地文夫（1996a）賢治童話における「観るもの」と「観られるもの」－「茨海小学校」と「猫の事務所」の場合－, 宮沢賢治イーハトーブセンター第五回研究会発表記録集.
- 米地文夫（1996b）宮沢賢治の創作地名「イーハトヴ」の由来と変化に関する地理学的考察, 岩手大学教育学部研究年報, 55-2.
- 米村みゆき（2007）「猫の事務所」, 渡部芳紀編「宮沢賢治大辞典」, 勉誠出版.

(2007年6月20日原稿提出)

(2007年11月5日受理)

# Kenji Miyazawa's "The Cat's Office" and the Abolishment of the Gun Office: Multiplex Implications Involving the Political World, Folksy World and Kenji's Internal World

Fumio YONECHI

## Abstract

Kenji Miyazawa's novella "The Cat's Office" has recently drawn attention as a work that deals with the problem of "bullying" suffered by the "kama-neko" or "kitchen stove cat," the lowest ranking clerk of the office in this story.

At the end of the story, the office was ordered to be disbanded by a lion who visited the office and was then abolished. My paper intends to clarify the fact that this work is a multiplex implication of the three worlds, or the political world, folksy world and Kanji's internal world. The implied political theme is the issue of the abolishment of "gun" (former administrative unit); the Hienuki Gun Office is the model of the Cat's Office as revealed from the descriptions in the novella of the location and role of the office and the personnel organization. The actual Hienuki Gun Office was abolished in June 30, 1926.

"The Cat's Office" was published in March of this year. Although it was determined by the national government that the gun offices were going to be abolished, the offices were kept operational for a while. But under the austere fiscal policy of Finance Minister Osachi Hamaguchi, the decision to abolish the gun offices was officially put into effect, and the offices were abolished when Hamaguchi was the Interior Minister. The lion in this novella is Hamaguchi who was nicknamed lion. The folksy implications of this work are that one of the feline clerks who is blackened with soot from the cooking stove is called "kama-neko" (cooking stove cat) and that "Shishimai" or the Lion Dancer visited the office to pray for safety against fire. The lion is like a guardian angel for the kama-neko. It also indicates the feelings of Kenji himself as he self-examines the relationship with his coworkers. In other words, the disbandment of the Cat's Office by the lion is a caricature of the abolishment of the gun offices and the decision of Osachi Hamaguchi. The two characters, the kama-neko, who is the leading part, and the cruising lion were born out of the folk custom concerning the cooking stove, and "bullying" by the staff of the office is based on what Kenji himself experienced from his work.

## Key words

Kenji Miyazawa, gun office, Osachi Hamaguchi, kama-neko, kamado-jishi